

2018年4月29日(日)／説教者：國分美生

説教：「死は終わりではない」

聖書：申命記34：1～9

「死は終わりではない」、「イエス様は甦りです。命です」。希望に満ちた命に関するメッセージを私たちはイースターに受け取ります。自分と自分につながるものの命と死、ということに関して思い巡らせることの多いこの時期ではないでしょうか。

モーセに導かれエジプトを脱出したイスラエルの人々は、ようやく「約束の地カナン」の目前までたどり着きました。ここに至る荒れ野での40年間に何度も人々は神を裏切り、怒らせています。しかしそのような人間に対し、神は変わらぬ愛をもって愛し、約束を果たしてください、という驚きを心に刻みたいと思います。

神がイスラエルの人々を顧み、約束してくださった彼らの居場所「カナン」を目の前にして、モーセは最後の時を迎えます。それに先立ち人々に説教という形で遺言を残します。申命記はシナイ山での契約を再確認する内容です。5章の負債の免除や、奴隷の解放についての記述を見るとわかる通り、神との関係だけでなく、隣人との正しい関係についても述べられています。モーセはイスラエルに対する最後の勧告として、これら律法を心に留め、守りなさいと伝えます。「それはあなたたちにとって決してむなしい言葉ではなく、あなたたちの命である。この言葉によって、あなたたちはヨルダン川を渡って得る土地で長く生きることができる」。モーセ自身は約束の地に入っていくことはできず、それは神の定めたことでした。イスラエルの民が約束の地で定住していく未来を、実際に見ることはありませんでした。

イスラエルの人々の物語はここでモーセの死と共に終わるのではなく、ヨシュアがモーセの後継者として起こされます。彼と共に人々が、モーセが残した言葉を携えて約束の地へ一歩踏み出す…そのところで申命記は閉じます。命はまたここで引き継がれ、新しい時代が開かれていく、という余韻が描かれています。救い主である神との約束は、贈り物として次の者へと手渡されていくのです。

キリストの十字架と復活は、死の向こう側にある希望へ私たちの目を向けさせます。もし私たちが命あるうちに真の平和を見ることがないとしても、それは私たちの敗北ではありません。キリストの福音と平和を祈る私たちの思いは、肉体の死を超えて進みゆきます。神のみ旨のうちに、受け継ぎ、受け継がれていきます。(國分美生)